

むさしのばやし

保持者 むさしのばやし保存会
指定 昭和46年(1971)4月6日



このおはやしは、文久2年(1862)武蔵野八幡神社のお祭りを賑やかにするため、吉祥寺村を中心にして生まれたといわれ、代々「吉祥寺囃子連中」により伝承されてきた。

大太鼓1、小太鼓2、鉦1、笛1で構成され、それに天狐の舞、獅子舞、天太の舞(おかめの舞)、抵牾舞(ひよっとこの舞)が入り、庶民の眼や耳を楽しませた。

当時、阿佐ヶ谷辺りにいた田淵流(中間)の師匠に習い、やがて笛吹きが育ち、村でも太鼓を整え、お祭りのときにはやしをするようになり、連中の数も次第に増えていった。

明治の頃は、テンポが速く威勢の良い船橋流(速間)を若者が好んで習うようになった。

大正の末、はやしの調子が崩れ悩んでいたところ、田無にいた西林源六(都無形文化財・故人)という船橋流速間を受け継ぐ師匠に指導を受けるようになり、以後、昭和にかけて大きな影響を受け、今日の歯切れの良いはやしに育っていった。

昭和37年(1962)、はやし連中100年祭を契機に「むさしのばやし」と呼ぶようになった。

(※注：はやしのテンポがゆるやかなものを大間、速いものを速間、中間を中間と呼ぶ。)

民間信仰資料(4件)

指定 昭和47年(1972)3月16日一括指定

武蔵野市における富士信仰は、**㊦**講という講集団に組織され、その規模も民間信仰としては大きく、富士講八百数十講中のうち5指に数えられる講中であつた。それは**㊦**を「講じるし」とする講社で、境・関前・西久保の各地区で200名前後の講員を擁していた。

㊦を講社として結成した最初の人物は、赤坂伝馬町の近江屋嘉右衛門(文化4~5年(1807~8)没)という先達で、この嘉右衛門の嘉をとって「講じるし」を**㊦**とした。

赤坂伝馬町で発生した**㊦**講は、赤坂伝馬町→巣鴨→板橋 行者街道 田無へとひろがり、当市域へは関前・境・西久保の順に普及したと思われる。

現在、武蔵野市には小林家(境南)・高橋家(境)・岡田家(緑町)・秋本家(関前)に、それぞれ関係資料が遺されている。これらはすべて当市域の民間信仰の存在を知るための資料として非常に重要なものであるため、一括して文化財に指定された。

(1) 小林家の民間信仰資料

所在地 吉祥寺北町4-8-3(中央図書館)
所有者 武蔵野市

小林家には、文化7年(1810)正月の「御伝文」(巻物)など5点の**㊦**講関係資料がある。この中には、「**㊦**境講社」の染抜きの入った風呂敷もあり、非常に興味深い。

なお、小林家の先祖万蔵氏は先達として活躍した。

昭和58年(1983)3月22日、小林氏より武蔵野市へ寄贈された。

(2) 高橋家の民間信仰資料

所在地 吉祥寺北町4-8-3(中央図書館)
所有者 武蔵野市

高橋家には、寛政元年(1789)正月の「食行身祿御伝文」をはじめ18点の**㊦**講関係資料がある。この中には、**㊦**と書かれた麻製の布袋や、三鈴や伏せ金などの金属製のものが含まれている。なお、高橋家の先々代定五郎氏は先達として活躍した。昭和58年(1983)3月22日、高橋氏より武蔵野市に寄贈された。



(3) 岡田家の民間信仰資料

所在地 緑町・吉祥寺北町4-8-3 (中央図書館)
所有者 個人・武蔵野市

岡田家には、寛永6年(1629)5月5日の「御身拔」をはじめ4点の関係資料が遺されている。このなかには、(丸)講から分離した丸山教の資料「丸山教御身拔」や、別掲の「だらにすけの看板」に関連する「だらにすけ包み紙用版木」が含まれている。

なお、岡田家の先祖五郎吉氏は先達として活躍したが、明治期には丸山教に入った。

(4) 秋本家の民間信仰資料

所在地 吉祥寺北町4-8-3 (中央図書館)
所有者 個人 (管理者 武蔵野市)

秋本家には享和2年(1802)8月17日の「元祖食行身禄御伝文」をはじめとして、総数112点とかなり多くの関係資料が遺されている。内容的にも、文化8年(1811)6月の「登山道中入用帳」、弘化2年(1845)6月17日の「元祖伊藤食行身禄御同行登山講」、安政2年(1855)3月の「富士山勸化姓名控帳」など、(丸)講の活動の実態をうかがわせる資料が数多くある。秋本家の先祖安五郎氏は先達として活躍した。

稲荷神社の絵馬

(非公開)

所在地 緑町1-6-5 稲荷神社神楽殿内
所有者 宗教法人稲荷神社
指定 昭和51年(1976)3月13日



稲荷神社の絵馬は、奉納者の氏名、奉納年月日を記しているものが多く、その年代は、嘉永5年(1852)2月井野氏奉納「算額」から大正末期頃までのものであり、この間に盛んに奉納されたものと思われる。なお、現在同社には総数35枚が保存されている。

絵馬は凶柄も明瞭で、家内安全・夫婦和合を表したものが多く、庶民の神仏に対する祈願の内容がよく表れている。これらの絵馬は、所沢や調布に住む絵馬職人によって描かれたものであり、それを願主が買い、氏名、奉納年月日を記して稲荷神社に奉納したものと思われる。各種の絵馬が今日まで保存されているのは、多摩地区においては数少なく、民間信仰上価値の高いものである。

岡田家の民間信仰資料 「だらにすけの看板」

所在地 吉祥寺北町4-8-3 (中央図書館)
 管理者 武蔵野市
 指定 昭和51年(1976)3月13日



縦107.5cm、横55.5cm、厚さ4.7cmの櫟製。「だらにすけ」は、原料がキハダの生皮やアオキの葉などからなり、もともと修行僧が「陀羅尼呪」修読のさい睡魔を防ぐために用いた苦味薬で、その効能は同看板の記載によると、「むしはら」「しやくつかえ」「くたりはら」「しよくしやう」「かくらん」「産前産後」「かんひやう」「酒毒」「牛馬の病」そして、最後に「其外万病によし」とあるが、とくに胃腸薬として売られていたようである。

また、この看板により、富士講の先達岡田五郎吉が大和国大峰山麓の瀬口兵右衛門の製造になる「だらにすけ」の「関東売弘処」の認可をうけ、広く関東一円の販売を手がけていたことがうかがえる。

この看板は、昭和47年(1972)に市文化財に指定された「岡田家の民間信仰資料」のうち、「だらにすけ包み紙用版木」と一括して取り扱われるべきものである。

なお、平成5年(1993)2月22日、岡田氏より武蔵野市へ寄贈された。

安養寺の 甲辛(庚申)供養塔

所在地 吉祥寺東町1-1-21 安養寺境内
 所有者 宗教法人安養寺
 指定 昭和47年(1972)3月16日



安養寺の門前にある碑高117cm、幅39.5cm、厚さ13cmの石碑。
 その銘に、

寛文五年^辛曆

南無阿弥施仏^{甲辛}_{供養} 敬白

十二月 日

とあり、その両脇と下に女性の名を混えて30数名の名前が彫られている。「南無阿弥施仏」は南無阿弥陀仏の誤りで、「甲辛供養」は庚申供養のことである。庚申塔に女性の名前が刻されたり、主尊に文字で阿弥陀仏を表しているのは、当地方では極めて珍しい。

庚申の信仰は、もと中国の道教の説で、これが平安時代に宮中貴族に伝わり、室町時代には民間にも普及し、共同体の信仰として定着した。その信仰の表現が庚申塔である。

この庚申供養塔は吉祥寺村の開発を語る資料で、銘記の人々は開発に関係の深い人物である。すなわち、彼らのうち10名の名前が、この石塔が建てられた前年の寛文4年(1664)の同村検地帳にも見える。彼らは吉祥寺村の開発に従事し、村の成立とともに、共同体の信仰として庚申講を結成し、それを記念する意味で、この庚申供養塔を建てたものと考えられる。

更新橋の庚申塔

所在地 緑町3-2 先
所有者 代表 緑町 個人
指定 昭和56年(1981)3月23日



練馬区関町との境にある更新橋のたもとに、安永4年(1775)建立の庚申塔が小祠に安置されている。庚申塔の正面には、「天下泰平」の文字の下に青面金剛の忿怒相が刻されている。

青面金剛は、元来、仏教の垂迹部の神で、病を流行させる神として考えられていたので、病鬼を払い除くために造られたのである。その後室町時代以降には、これが道教思想と習合して庚申信仰の主尊となり、とくに江戸時代には、広く全国的に庚申塔として造像され信仰されるようになった。

また、この庚申塔の右側面には、願主として西久保村の下田伊右衛門ほか3名の氏名が、その左上部には「右府中道」とそれぞれ刻されている。その左側面には、まず右上部に「左深大寺道」と刻され、中央に「安永四乙未十一月吉日」、その下に吉祥寺村の片居木清口ほか4名および石工の関長右衛門の氏名が刻されている。

以上の記銘から、この庚申塔は、吉祥寺村と西久保村の村民が共同で建立したことや、この塔が道標を兼ねていることなどが分かる。一般的に、庚申講は一村内の人々によって結成されるものであり、こうした例は珍しい。恐らくは、道標を兼ねたことから、このようなことになったのであろう。

境南町の庚申塔

所在地 境南町3-782-3 (境南町3-25)
管理者 庚申講中
指定 昭和57年(1982)3月31日



この庚申塔は境南町3丁目の富士見通りの一角に建てられ、祠に納められている。

この庚申塔の正面には更新橋の庚申塔と同じ青面金剛像が刻され、左に太陽、右に三日月が彫られ、下に悪鬼を踏まえ更に使者としての三猿が彫られている。右側面には「宝暦二年壬申天十一月吉日」、左側面に「堺邑講中拾九人」と刻されており、宝前には鈴、下げ緒が新設され、古くなると堂内に飾られ、投げ銭がおびただしく投げ込まれている。塔形は唐破風型の笠石を持つ見事なものであり、宝暦の俵を偲ぶ庚申塔の一つといえる。

講には経済的互助を目的とするものもあるが、この庚申塔を中心にした講は信仰を中心としたものであったと思われ、今も庚申講中により祭事が行われている。種々の講組織がほとんど消滅している現在、貴重な残存例といえる。

なお、この庚申塔の管理は、講中の講元ら役員を中心に行っている。